



を 読 む

河合文化教育研究所 主任研究員 丹羽健夫

高 名な数学者でお茶の水女子大学の教授である藤原正彦氏が、かつて『祖国とは国語』という本を著した。数学者がですぞ。その意味はこの本を読むと深くうなずける。

冒 頭がアメリカの国語教科書。周知のごとくアメリカはいろいろな国からやってくる移民の国である。従って国語教科書は「多様性の受容」と強く結びついている。教科書の中でも登場人物の人種が偏らないように配慮され、学年は違うがひとつの教科書会社の教科書で、白人のシンデレラ、中国版シンデレラ、黒人版シンデレラが出てくるものがあるようだ。

こ の多民族国家ということは、この本の最後に登場するケニア共和国でも同様で、この国はなんと70以上もの民族語を抱えているのだ。日本ももちろん単一民族国家ではないが、これほどの多民族国家となると国語教科書の作成に関しては、我々の想像を超えた苦勞があるのであろう。

ア メリカのいまひとつの教科書のバックボーンは「アメリカン・

ドリーム」の礼賛」である。貧しい家に生まれて刻苦勉励し大リーグ野球で最高殊勲選手に選ばれ、また2,130試合連続出場の記録を持つ猛打者ルー・ゲーリックの生涯を18ページにわたって紹介しているものもある。

そ こまでやっていたのか、と驚かされるのがフランスである。

「フランスの教科書制度は次の『3つの自由』を特徴とする。第1は、出版社による教科書発行の自由。・中略・。第2は学校の教科書選択の自由。第3が、教員の教科書使用の自由である。教員には教育方法の自由が保証されている。つまり教員は教科書を使ってもよいが使わなくてもよいという自由だ。日本のように国が教科書を検定し、教育委員会が教科書を採択し、教員に教科書使用義務を課す仕組みとはおよそ対極にある」

う んと唸ってしまう。そうだな、日本の先生は一般的には出

来合いの教科書を教えるだけなもの。本当は何らかのかたちで教科書作成あるいは選択の過程に、もっとかかわったほうがいいのではないだろうか。予備校では独自の教科書で授業を行っているが、教科書作りにかかわった先生の授業は決まって人気が高い。

フ ランスの教科書の上記の説明のあと筆者は続ける。「フランスの教員に日本の教科事情を説明したときに、『そういう国で教員はしたくない』と言われてしまったこともある」

こ のほか本書ではイギリス、ドイツ、フィンランド、ロシア、中国、韓国、タイのそれぞれの国語教科書が紹介される。それぞれのお国ぶりが集約的にわかり興味深い。同時にそれぞれの国の教育制度、例えば教科書検定があるのかどうかなどを知ることができる。

ま た、この本は監修者の二宮先生はじめ11人の主に教育学の研究者などによって、国ごとに書かれているが、いずれも格調が高く読み応え十分である。



◀『こんなに違う! 世界の国語教科書』
二宮 皓 監修
メディアファクトリー新書002
定価 本体740円+税